**横手の雪祭り**

横手の雪祭りは、毎年2月15日、16日、17日の3日間行われる。日本では1872年まで旧暦が使われており、この祭りは旧暦1月の最初の満月を記念するものである。最初の2日間は「かまくら」と呼ばれる大規模な雪のドームで、筵（むしろ）や小さな火鉢、水の神を祭る祭壇などが飾られる。神棚が設けられたかまくらは市内各所に作られ、蛇の崎橋の川原には無数のミニかまくらを見ることができる。最終日には「ぼんでん」と呼ばれる特別な装飾が施された竿が、1年の安全と繁栄を祈願して、市内を3.5kmにわたって旭岡山神社までかつぎ運ばれ奉納される。

**かまくら**

400年以上の歴史を持つかまくらは、武士と商人の間で生まれた2つの正月行事が融合して、現在のようなドーム型になっている。1900年代初頭、かまくらは主に各家庭が自分の子供のために作っていた。現在では、雪祭りのかまくらは、専門の職人によって作られている。現在のかまくらは、以前のものよりはるかに頑丈で、高さは通常3メートルあり、何週間も立ち続けることができる。かまくら作りは、雪をドーム状に積み上げ、2〜3日放置して凍らせて固める。その後、半日かけて内部を掘り出し、神棚やお供物を置く雪の棚を作る。この祭りでは、約80個の実物大のかまくらが作られて展示され、蛇の崎橋の下の河川敷に作られるミニかまくらは数千個にもなるという。

**ぼんでん**

祭りの2日目と3日目には、ぼんでんと呼ばれる飾り棒が街を練り歩き、旭岡山神社に奉納される。ぼんでんは、神の霊を一時的に宿す物であると同時に、制作した団体を表す華やかな装飾品でもある。ぼんでんは、市内の異なる地域や地元企業によってそれぞれ作られている。秋田県内の他の都市でもぼんでん祭りは行われているが、横手のぼんでんの特徴は、高さ5メートル、重さ30キロの大きさと、竿の上に飾られた干支や人形である。

2月16日には、横手市役所の近くでぼんでんのデザインや出来栄え（作り手の技術）を競う梵天コンクールが行われる。翌日、各ぼんでんはリレー方式で旭岡山神社に運ばれる（旭岡山神社までの険しい山道は、参加者が交代で登っていく）。境内の入り口では、ぼんでんを担いだ男たちが互いにぶつかり合いながら、他の参加者で混雑している門をくぐり抜けようとする。最後に、本殿に奉納され、五穀豊穣、商売繁盛、家内安全などの祈願が地域全体で行われる。